

知的障害児における紙芝居視聴時の視覚探索パターン

○倉持 光
(守谷市立黒内小学校)

勝二博亮
(茨城大学教育学部)

KEY WORDS: 視覚探索 知的障害 紙芝居

1. 目的

紙芝居は日本で生まれた独自の文化であり、絵本と共通する部分が多いものの、相違点も指摘されている。例えば、紙芝居は数人あるいは集団で行われることが多く、そのほとんどがストーリー性を伴うことから、物語のストーリーを理解できるようになる3歳以上から用いられるといわれている(後藤, 2002)。しかし、紙芝居の読み聞かせにおいて、幼児が語りに合わせて登場人物や重要となる事物に対して視線を向けているのかは明らかにされていない。一方で、知的障害児においては、絵の中で情報価があまり高くない箇所に対しても均等に視線を向けるという指摘もあり(前川, 1980)、紙芝居のようにストーリー性を伴う教材を用いる場合は、個々の子どもが絵の情報をどのように入手しようとしているのか実態を把握した上で適した教材を選定する必要があるだろう。

そこで、本研究では紙芝居を題材とした読み聞かせ場面を設定し、健常幼児を対象として視線パターンの発達的特徴を明らかにするとともに、知的障害児の数例に対しても計測を行い、場面や語りに応じていかなる視線パターンの違いがみられるのか検証することを目的とする。

2. 方法

(1) 対象児: 健常幼児は、幼稚園に在籍する年少から年長までの園児 53 名(年少: 16 名, 平均 CA4.0±0.24 歳, 年中: 19 名, 平均 CA5.0±0.31 歳, 年長: 18 名, 平均 CA5.8±0.31 歳)。知的障害児事例は、特別支援学校の小学部に在籍する知的障害児 2 名(X 児(ダウン症): CA8.0 歳, MA2.6, Y 児(自閉症): CA11.4 歳, MA3.1)。対象児の保護者に対して研究内容を事前に説明し、同意が得られた児童のみ対象。茨城大学教育学部研究倫理委員会による承認を得て実施。**(2) 計測装置:** Tobii T120 アイトラッカーを用いて計測。**(3) 手続き:** 童心社から市販されている紙芝居「ばけこちゃんのお弁当」を参考に、登場人物や台詞などを改変した全 8 場面(題字が書かれた表紙を含む)からなる静止画と読み聞かせ音声を作成し、紙芝居視聴時の視線を計測。主人公がお弁当を忘れ、犬のワンタロウとともに友達にお弁当を分けてもらうストーリーで、視聴後には内容に関する簡単な質問に口頭で答えることを要求。**(4) 分析:** Heat map 分析から場面ごとに關心領域(Area of Interest: AOI)を設定し、AOI 内の注視回数を算出。健常幼児では、AOI×群の 2 要因分散分析を実施。

3. 結果および考察

(1) 健常幼児における紙芝居視聴時の視線パターン

各場面による Heat map 分析から学年のいかんに関わらず登場人物の顔や事物に注視していることが分かった。そこで、各場面で設定した AOI における注視回数を分析したところ、主人公や新しい登場人物、物語の文脈で重要となる事物に

して注視する傾向がみられた。さらに、台詞ごとに Heat map を分析した結果、群のいかんに関わらず、同一場面でも台詞の登場人物へ視線を向け、話者の交代にあわせて視線も移動していく様子が認められた。紙芝居のように語り手が登場人物ごとに声色を変えて表現しても幼児期の初期から話者の方に視線を向けることが明らかとなった。一方、題字を含む表紙は、群間で文字への注視パターンが異なっており、注視回数について AOI (文字・人・犬) × 群 (年少・年中・年長) の 2 要因分散分析を実施した。その結果、交互作用が認められ ($F(4, 100) = 17.379, p < .01$)、年少群よりも年中および年長群で文字への注視が有意に多かった ($p < .01$)。年中児の夏頃には約半数の子どもが平仮名文字を読めるようになることから(秋田ら, 1995)、年少群は可読できる文字が少なく、結果として他群に比べ文字への注視が少なかったと考えられる。

(2) 知的障害児における紙芝居視聴時の視線パターン

知的障害児の両事例とも、健常幼児と同様に登場人物に対してよく注視するものの、物語に関連する事物への注視は少ない傾向が認められた。例えば、物語後半のワンタロウの肉を分け与える場面では、健常幼児が登場人物よりも肉により注視するのに対して、知的障害児では肉よりも登場人物を注視していた(図)。一方、表紙に関して、X 児は年少群と同様に登場人物に視線をより多く向け、文字への注視はわずかであったのに対し、Y 児は、画面上部にある文字を左から右へと視線を移動させる探索パターンを示し、文字への注視回数も比較的多かった。各事例における平仮名習得状況と照合すると、X 児は平仮名読みが未習得、Y 児は平仮名読みが可能であった。平仮名習得状況が文字への注視に影響していることが本事例において明らかとなった。以上より、今回対象とした知的障害児においては、MA3 歳程度であっても紙芝居中の登場人物をよく注視し、台詞時には発話者に視線を向けることが明らかとなった。一方で、両事例とも発話内容に関連した事物への注視が少なかったことから、発話内容に応じた事物への注視が困難であることが推察された。

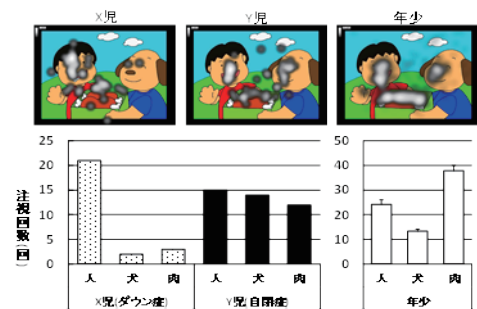


図 1 知的障害児および年少群における物語後半場面での Heat map(上)と各 AOI の注視回数(下)

(KURAMOCHI Hikaru, SHOJI Hiroaki)